

はじめに

ぼくがこんなふうに、B-612 番の星の話をして、その番号までもち出すというのも、じつは、おとなの人たちがよくないからです。おとなというものは、数字がすきです。新しくできた友だちの話をするとき、おとなの人は、かんじんかなめのことはききません。「どんな声の人？」とか、「どんな遊びがすき？」とか、「チョウの採集をする人？」とかいうようなことは、てんできかずに、「その人、いくつ？」とか、「きょうだいは、なん人居ますか」とか、「目方はどのくらい？」とか、「おとうさんは、どのくらいお金をとっていますか」とかいうようなことを、きくのです。そして、やっと、どんな人か、わかったつもりになるのです。

(中略)

だけれど、ぼくたちには、ものそのもの、ことそのことが、たいせつですから、もちろん、番号なんか、どうでもいいのです。

——サン＝テグジュペリ著 内藤濯訳『星の王子さま』より

近年、あらゆる領域で、質的研究ということばが人々の口に上っているし、質的研究に関連する多くの書物や論文が発表されている。したがって、本書を手にする多くの人にとって「質的研究」ということばは、決して初めて見るものではないだろう。

しかしこのことばを初めて聴いたとき、どのように感じただろうか。人文科学や社会科学の多くの研究者や学生は、「いまさら質的などと言わなくても、研究というのは本来、質的に実施するに決まっているではないか」と思ったかもしれない。しかし逆に、科学、工学、そして医療系などの理系の領域の研究者や学生は、「いったいどうやったら、質的に研究することなどできるのか？」と思ったかもしれない。このように、質的研究は、その名前がよく知られるようになったほど、その内容が知られているわけではない。

本書は、特定の領域における質的研究について解説したものではない。とはいえ、筆者の研究的背景や研究経験上、次のような人が読者として想定されている。それは、「質的研究」を自覚的に実施してきた、あるいは実施しようとしている研究者や学生、今日的な意味での「質的研究」ではなく、非量的な研究が伝統的になされてきた教育学などの領域の研究者や学生、医学や医療専門職教育の研究者、日常の職務から研究すべき課題を見いだしている医師、歯科医師、看護師、薬剤師などの

医療専門職、その他、人間が人間に働きかけるような営みと、その研究（本書では、それらを「人間科学」と呼ぶことにする）を行う人々である。

また、想定する読者の中には、質的研究を実施したいと考えている量的研究者も含まれている。筆者は幸いなことに、質的研究を始めた1991年頃から、質的研究について量的研究者に話し、量的研究者と議論するたくさんの機会に恵まれてきた。そのため、質的研究には比較的珍しく、量的研究者が質的研究を理解するとき何ぞ障害になるのかについて、さらに言えばそもそも、量的研究者が質的研究に対して抱く疑義・疑念についても、理解する機会に恵まれてきたと考えている¹。そしてむしろ質的研究に関するそのような疑義・疑念を自らに問い、検討することで、質的研究に対する認識を少しずつであるが深めようとしてきた。

本書は、そのような多様な読者を想定し、1人の研究者が質的研究を実施する際に問題となるさまざまなことについて、順番に取り上げていく形で書いている。ところで、「1人の研究者が質的研究を実施する際に問題となるさまざまなこと」とは、いったいどのようなことであろうか。これについて、量的研究と比較して考えてみると、量的研究の方法が高度に定式化・組織化されているのに対して、質的研究の方法は多様で个性的である。そのため、質的研究を実施する研究者は、研究のさまざまな局面で、「どういう方法でデータを採取すべきだろうか?」「どういう方法でデータを分析すべきだろうか?」という疑問とともに、「こういう方法でデータを採取していいのだろうか?」「こういうふうにデータを解釈していいのだろうか?」などと悩むことになる。またそれ以前に、「そもそもこういう研究をしてもいいのだろうか」と悩むことさえある。それはたとえば、「たった1人のインタビューを対象とした研究」、「自分の家族（子や夫など）を対象とした研究」、さらに「自分自身を対象とした研究」などである²。

そのようなとき、同様な先行研究があれば、それを評価しながら、自分がそれを行うかどうかを検討すればよい。そして論文には、その先行研究を適切に引用すればよい。

しかし先行研究が無かった場合、その問題の答えを得るための方法は1つしかな

¹しかし本書は、次のような方々にも読んで頂きたい。それはまず、「質的研究とは何か怪しい感じがするが、うまく言えない。そもそも自分は質的研究の何を怪しいと思っているのだろうか」と考える量的研究者である。そのような方々には、質的研究に感じている怪しさを、そのような方の立場でいったん言語化した上で、それに答えることになるだろう。

²こういった問題についても、読者が自立して考えられるようになることを、本書はめざしている。

い。それは、「質的研究とは何か」という原点に戻って、それらを検討することである。

たとえば、質的研究も量的研究と同様に客観性を重視するものだと考えるなら、客観性の無い研究方法を採用することは意味がない。そして量的研究にとって、客観性を担保する代表的な手段の1つは、適切なサンプルサイズの設定であろう。だから、質的研究でも同様な方法で客観性を担保しなければならないとするなら、 $n=1$ （観察やインタビューの対象が1人だけ）の研究はしてはいけないということになる。また、自分の家族やましてや自分自身は客観的検討の対象ではなく主観的理解の対象であると考えたら、自分を対象にした研究は主観的なものとして排すべきだということになる。それにもかかわらず、このような研究は実際に成立しており存在している³。だとしたら、考えられることは3つしかない。1つめは、質的研究は客観性が不必要な研究なのだと考えることである。2つめは、質的研究でも客観性は必要であるが、量的研究とは異なる方法でそれを担保するのだと考えることである。3つめは、そのどちらでもなく、 $n=1$ の研究や自分自身を対象とする研究は、本来は実施してはいけない間違った研究なのだと考えることである。

このような問題は、いったんある研究を開始した後で、データの分析のさまざまな局面でも起こる。たとえばあるインタビューイがこう言ったとする。「子どもと教師の間に機械を介在させることは、教育を非人間的なものとしてしまうから、コンピュータの教育利用には反対だ。」しかし分析者は、慎重な分析の結果、次のような結論に至る。「このインタビューイは、本当は授業でコンピュータを利用したいのだが、コンピュータが苦手であまりうまく使うことができないので、それを隠すためにそう言っている。そしてそれは、自分自身も気がついていないため、決して意図的に嘘を言っているわけではない。」つまり分析結果は、そのインタビューイが言っていることとは逆である。そのため分析者は、「分析とは、あくまでデータにもとづいて行うべきなのに、インタビューイの意図に反するような、このように踏み込んだ解釈をすることは許されるのか」と悩むことになる。しかしそのような解釈が許されるか許されないかの答え⁴を得るには、「そもそも質的研究における分析

³ $n=1$ の研究として、安藤（2014）、山元（2017）など、自分自身を対象とした研究として、近藤（2016）、神原（2016）などがある。

⁴気の早い読者のために、ここであらかじめ簡単に答えを書いておくと、それが許されるか許されないかは、一律に決まるのではなく、それぞれの質的研究の依拠するパラダイムによる。これについては第1章1節を参照。

とは何か」,そしてそれ以前に,「そもそも質的研究におけるインタビューとは何か」,という本質的な問いに帰って検討する以外に方法はない。だからこそ,筆者による質的データ分析手法 SCAT のワークショップは,単独では行わず,必ず質的研究のセミナーと一緒に開催している⁵。

ところで,後述のように筆者は1991年頃から,教育におけるテクノロジー利用についての質的研究を行ってきた。それは教育工学という量的・実証的研究者らが中心となる世界でなされてきた。そして2005年頃からは,医学教育研究(歯科医師教育,看護師教育,薬剤師教育などの医療専門職教育を含む)と臨床研究の世界で,量的・実証的研究の背景を有する方々と,質的研究について交流してきた。筆者は元々,社会科学系の研究者であるから,その立場で質的研究を考えることは本来的な仕事である。しかし量的・実証的研究者との交流で,質的研究について説明をし,そこで量的研究者から,疑義,疑念,また鋭い反論を受けてきた。それらは筆者に,質的研究を量的研究の観点から相対化する機会を与え,「研究とは何か」についての,量的研究と質的研究とを包括したメタ的な考察を行うことを迫ってきた。

また筆者は2007年に,本書第Ⅱ部で解説する質的データ分析手法「SCAT」を開発してから,これまで,質的研究のセミナーとSCATのワークショップを数多く実施してきた。そして近年は,医療研究や医療者教育研究における質的研究のプロトコル(研究計画書)作成,つまり質的研究をデザインするセミナー・ワークショップも実施してきている⁶。そこでは,参加者に必ず事前アンケートに答えて頂き,量的研究と質的研究の経験をたずねるとともに,質的研究一般に関する疑問と,参加者自身の領域での質的研究に関する疑問を書いてもらっている。筆者はそれを読んでからセミナーやワークショップに臨むが,筆者の担当するセミナーやワークショップは,これまでのこのようなたくさんの疑問や質問にもとづいて構成されているので,その答えとなる内容のほとんどは,その中にすでに含まれているし,そしてもし,それらがセミナーやワークショップの内容として含まれていなければ,その中にその問いや答えが含まれるように毎回の準備をする。そのため,そのような疑問や質問の多くは,セミナーやワークショップを通じて,参加者が自ら解決す

⁵ ただしきわめて限定された集団(たとえばある医学部のある医局内など)に対しては,質的研究のセミナーを事前にe-learningで学習することを前提として,SCATのワークショップをしたことがある。

⁶ これ以外に近年,医学教育研究等における研究倫理についてのセミナー・ワークショップも担当することがある。

ることになる。つまりそのアンケートは、参加者が、自分の疑問を明確にしてセミナー・ワークショップに臨むための自己省察と事前学習の機会にもなっている。

しかしなかには、それでは解決できず、最後にそれを取り上げて解説しなければならないこともある。そのような疑問や質問については、セミナーやワークショップの前にあるいはそれらの中で、質問者に、その質問の意味や背景を確認することもある。それらの疑問や質問の中には、筆者が予測もしなかったもので、かつ質的研究の本質に迫るような有意義なものが含まれることが多い。経験を経るにつれて、初めて出会う疑問や質問は少なくなったが、それでも、数回に1回、そういうものに出会い、それについて筆者も悩み、種々検討した結果を参加者全員と共有する。そのような経験の蓄積は、質的研究者かつ質的研究方法論研究者としての筆者にとって、かけがえのない財産である。

本書はそのような経験の蓄積にもとづいて執筆されている。その意味で本書には、質的研究を行おうとする多くの方々の疑問や悩み、そして量的研究者や量的研究と隣接する領域の研究者の、量的研究との異同等点などについての疑問や悩みが反映されている。(そのため医療系の概念の使用や文献の引用がやや多くなっているが、それは非医療系の読者の理解の妨げにはならないように最大限注意して執筆している。)

本書を執筆する上で筆者が心がけたのは、読者の手元にはないような書籍からの、読者が消化しきれないほどの大量の引用にもとづく、学術的な解説書にならないようにすることである⁷。その理由はいくつかある。まず、そもそも筆者はそのような碩学ではない。また、本書の第II部でSCATについて解説する必要があるため、あらゆる点を網羅したような包括的な質的研究の解説書ほどの紙幅を有さないという物理的制約もある。

しかももう1つには、本書の対象とする読者として、量的研究者や、医療系専門職やその大学院生や学部生なども想定されており、それらの人たちの多くは、人文科学的、社会科学的な難解な概念を示されることには抵抗があることを、筆者は理解しているからである。そして同時に、明晰で具体的で説得性のある内容を、平易なことばで適切な比喻などを用いて示せば、それらの人たちの多くは、自分の立場から質的研究を本質的に捉えられるようになることも、筆者は経験を通して知っている。じっさい、そのように学んだ医学部の学部生が、研究発表で、フロアの経験あ

⁷ そのために、引用が必要な場合は、できる限り読者がインターネット上で取得できるようなPDFが公開された文献を示す方針である。

量的研究者や座長（司会者）からの質的研究に対する質問に、驚くほど見事に答えた例をいくつも知っている。筆者は、そのような経験を通して、質的研究の本質的な特性は、いくらでも平易に伝えられるという確信を有することになったし、そのことにつねに努めなければならないと考えてきた⁸。論文とちがってセミナーやワークショップでは、多量の引用によって裏付けをすることにはあまり意味がなく、端的で明晰で了解可能な説明こそが参加者を納得させる。したがって、本書をぜひ、読者自身の質的研究に関する疑問に照らしながら読んで頂きたいと考えている。

なお、質的なデータを扱うが、人間の人間に対する働きかけという営為を直接には扱わず、文化や習俗の記述を主たる目的とし、そのための独自の伝統的な研究方法とその表象の手法を確立しているような領域、たとえば文化人類学などの領域では、自分たちの研究を質的研究とは呼ばないし、自分たちを質的研究者とは呼ばないのが普通であると思う。もちろんそのような研究者にとっても、本書から得るものはあるはずである。しかし本書は直接には、そのような領域の研究を対象とするものではないことを断っておく必要がある。また、質的研究には、本書に比して、より先鋭的なパラダイム（認識論や価値観）にもとづくもの（後述の「質的研究スペクトラム」の最も右端に位置づくもので、フェミニスト理論、批判的人種理論、クイア理論など）もあるが、本書では、それらを直接には扱わず、いくつかの註で触れるにとどめる。

なお本書は、筆者の上記のような量的研究者との研究交流の背景から、量的研究に理解のある読者には、できるだけ、それが妨げではなくむしろ助けとなって質的研究を理解できるように記述している。したがって質的研究に関心をもつ量的研究者も、大きな抵抗なく読めると考えている。本書はこのように、特定の領域の研究者や実践者を想定した、限定された専門職を対象としたものではない。そのことが、本書に「間口の広さ」と「敷居の低さ」を与えているとしたら、それこそが本書の存在意義であると考えられる。そのため、本書はぜひ、頭と体をリラックスさせて読んで頂きたい。そのことを通して本書は、質的研究者にとっても量的研究者にとっても、量的な研究と質的な研究とを相対化した、研究についての包括的な認識をもつきっかけとなるはずである。

⁸ 筆者のこのような考え方は、「科学のどのような概念でも、知的性格をそのままに保って、発達のどの段階のどの子どもにも効果的に教えることができる」というブルーナー（1986）のモデルと類似性がある。筆者は上記のような経験だけでなく、学生時代に学んだこのようなモデルを合わせて、上記のように考えているのかもしれない。